

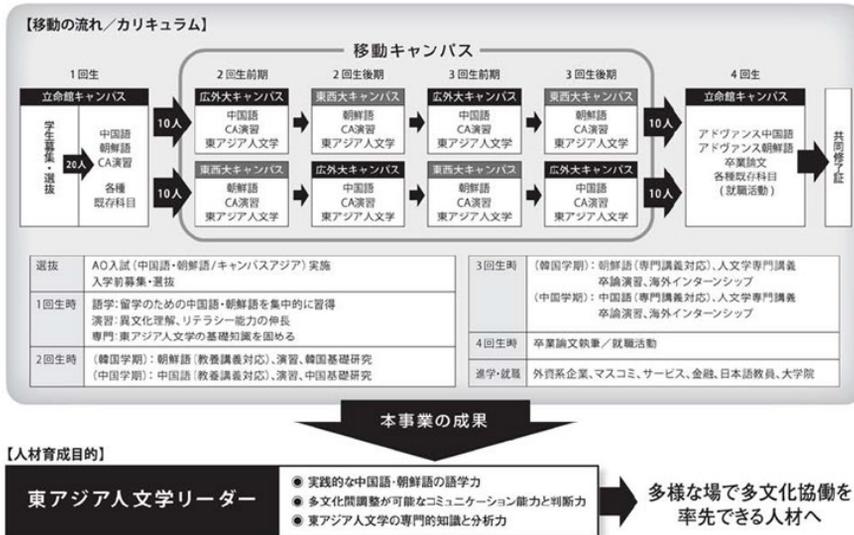
# 大学の世界展開力強化事業(平成28年度採択) 立命館大学 取組概要

## 【事業の名称】

平成28年度 立命館大学(タイプA-① CAMPUS Asia)  
東アジア人文学リーダー養成のための、日中韓共同運営移動キャンパス

## 【事業の概要】

「日中韓を共に移動しながら、3カ国の人文学を現地の言語で学び合う」というこれまでのパイロットPを基礎とし、新たに以下の事業(「本事業の特徴」を参照)を行うことで、持続可能な教育モデル(キャンパスアジア「立命館モデル」)を構築しキャンパスアジア(以下CAP)の拠点の高度化を図る。



## 【交流プログラムの概要】

本事業は、パイロットPで構築することができた3大学共同運営の国際教育システムを基盤としている。学部2・3回生時に実施する「移動キャンパス」を含む4年一貫のカリキュラムに、人文学と複言語主義に基づく「東アジア人文学リーダーの育成」という3大学共通の人材育成目標を設定し、語学や人文学科目などのカリキュラム内容・成績管理(共通GPA)・単位認定基準の共通性・統一性を確認し、各大学のスクールカラーや優れた特徴などのオリジナリティも重視している。

学生交流の規模をパイロットPから拡大し、4年後には毎年3大学の学生が60名ずつ卒業することで、3カ国にまたがる累積型の人材バンクが形成される。育成した人材自体が東アジア交流のプラットフォームや、グローバル・コミュニケーションへのアクセスゲートになり得る。パイロットPで協力を得た企業・自治体や卒業生との協力体制の継続・拡充によって、パイプの太い産学官連携体制を組み、プログラムへの支援や助言を得ながら運営を行う。

## 【本事業で養成する人材像】

日中韓の全ての言語・文化・歴史・社会を深く理解し、その高いコミュニケーション能力を発揮しお互いの立場や考え方を尊重する中で、文化的な国際交流や教育研究の分野など国際協働の場で今後活躍できる優秀な人材を養成する。

## 【本事業の特徴】

### ①交流学生数の増加と留学期間の長期化、AO入試の実施

パイロットPでは各大学10名だった参加学生を20名に倍増し、計60名の学生が3カ国を移動しながら学び合う。また、2年間の移動キャンパスにおける海外での学習期間も倍増する。中国語・朝鮮語の既習者を対象としたAO入試を実施し、高校から大学への継続学習を促進する。

### ②派遣前教育の体系化と東アジア人文学専門講義の多様化

移動キャンパス開始前の1回生時には、2カ国語学習の体制を強化し、異文化理解や多文化間調整等の能力を養うための小集団教育を実施する。また移動キャンパス受入時には、本学の学生と中韓のCAP生が1つのクラスで学ぶことを前提とした、東アジアの人文学への深い理解のために特化された、専門科目群を開講する。

### ③移動キャンパス時のピアラーニング・ピアサポート体制

CAP生以外の自国学生が中韓のCAP生の生活・学習を支援するピアサポート体制を構築する。

### ④教育効果の分析と発信

本事業を対象とする研究者による共同研究を推進し、プログラムの成果を世界に向けて発信する。

### ⑤教育の質保証に繋がる安定した運営体制

パイロットPでも実施してきた三大学教職員合同会議の内容を充実させ、カリキュラム設計や成績管理等の協働性をより高める。

### ⑥キャリア形成支援

国内外でのインターンシップやCAPのOB・OGと連携したキャリアセミナー等を実施し、具体的なキャリアビジョンを描く機会をCAP生に提供する。

## 【交流予定人数】 <タイプA-①>

	H28	H29	H30	H31	H32
日本(J)での受入	C 0 K 0	C 20 K 20	C 40 K 40	C 40 K 40	C 40 K 40
中国(C)での受入	J 10 K 10	J 30 K 30	J 40 K 40	J 40 K 40	J 40 K 40
韓国(K)での受入	J 10 C 10	J 30 C 30	J 40 C 40	J 40 C 40	J 40 C 40

# 1. 取組内容の進捗状況(平成28年度)

【東アジア人文学リーダー養成のための、日中韓共同運営移動キャンパス】  
(選定年度28年度・(タイプA-1 CAMPUS Asia))

## ■ 交流プログラムの実施状況



〈CAP生専用語学授業の様子〉

### ○移動キャンパス派遣前教育

CAP生専用の小集団演習を開講し、東アジアに関する基礎的かつ専門的な知識を教授するとともに、情報収集やプレゼンテーション、異文化理解などの能力を高める教育をおこなった。また語学教育の強化として、本学文学部の一般の外国語科目に加え、CAP生専用の語学科目を開講した。

### ○国際的なピアサポート

CAP生専用の語学授業に、本学で学ぶ中韓留学生がアシスタントとして参加することで、実践的な会話練習をすることができた。また、平成29年度から本学で学ぶ中韓CAP生の生活・学習を支援するサポーター(21名)を結成した。この組織の充実により、学生受入に関する体制を組織的に整備することができた。

## 交流プログラムにおける学生のモビリティ

### ○日本人学生の派遣

「キャンパスアジア・移動キャンパス(前期)」で、10名が広州(中国)へ、10名が釜山(韓国)に派遣された。また、8月下旬から9月中旬にかけて、中国と韓国で各2週間のイニシエーション実習を行った。CAP生は現地で語学学習を受けるとともに、次年度から留学する国での生活を体験することで、移動キャンパスへの効果的な準備となった。

### ○移動キャンパス以外の学生派遣・受入について

派遣については、期間が1週間程度のプログラムを中国に18名・韓国に39名、2週間程度のプログラムを中国に16名・韓国に28名、1ヶ月程度のプログラムを中国に12名、1セメスターのプログラムが中国に7名・韓国に6名派遣した。また、受入については、修士複数学位制度で中国から2名、韓国から3名、1週間程度の日韓中連携講座・夏期集中講義で韓国から20名を受け入れた。

### ○外国人留学生の受入

日本での「キャンパスアジア・移動キャンパス(前期)」の受入が平成29年4月開始のため平成28年度の実績はないが、受入学生は平成29年の3月中旬に入寮した。

## ■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

### ○3大学教職員合同会議と実務者会議

10月末に東西大学校で3大学教職員合同会議をおこなった。また、4月・10月(計2回)に遠隔会議システムを利用した実務者会議を実施し、各大学の運営上の成果や課題を議論した。

### ○プログラム説明会、留学生活説明会、学生インタビュー

プログラム生募集前にガイダンスを実施し、応募学生の興味と専門学習とのミスマッチを回避した。また、プログラム専用の演習授業で、異文化理解やカルチャーショックなどの留学期間の学習・生活に向けた講義や、留学経験者を招いての留学生生活相談会を実施した。さらに、プログラムに関する要望・疑問・不安等を聞く学生面談を実施し、出された意見をプログラムの運営に反映させた。

## ■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

外国人学生の受入、日本人学生の派遣とも、計画調書に記載した内容を着実に実行できており、中でもCAP生の共同研究室である「CAPカフェ」を学生交流と授業外学習を促進するよう改良した。課題としては、より円滑な学生移動が可能になるよう、3カ国間で手続き内容の共有化をさらに図る必要がある。また、国内外でのインターンシップや、国際的な業務をこなせる社会人としてのキャリア教育を充実させる必要がある。CAP生の特性分析と養成する人材像を具体化しながら進めていく予定である。

## ■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況/情報の公開、成果の普及

計画調書に記載した計画内容は概ね順調に進捗している。特に事務体制の強化については、新たに2名の専門職員を配置し、海外大学での職員研修を実施した。またプログラム専用ウェブサイトの改良をしたことで、プログラムの進捗をより明確に発信できている。課題としては、日中韓に留まらず国内外の教育機関との交流や本プログラムの教育内容と成果の普及をより活性化させることである。今後の展望としては、本プログラムの組織・運営の自己評価を実施し、言語教育・異文化教育の研究者による教育効果検証を行いながら、客観的な成果を蓄積することである。そしてその成果をウェブサイトや事業報告書(日・英語版)、シンポジウムの開催等で世界に発信する予定である。

## ■ グッドプラクティス等

### ○サポート・リーダー/サポート組織の設置

前述でも述べた通り、29年度に中国と韓国から来るCAP学生をサポートする学生サポーター組織(21名)を1月に設置した。2月には3カ国の学生がともに学ぶ集中講義に9名が参加し、3月には関西国際空港で中韓学生の出迎えと交際寮の入寮サポートをおこなった。サポーター組織ができたことにより、プログラムの学習効果と意義を大きく拡大することができた。

### <タイプA-①>

H28 各国での受入学生数		
受入国	移動 キャンパス	その他 プログラム
日本(J)	C 0 K 0	C 2 K 23
中国(C)	J 10 K 6	J 53 K 0
韓国(K)	J 10 C 10	J 73 C 6



〈韓国・釜山での3大学教職員合同会議〉

## 2. 取組内容の進捗状況(平成29年度)

【東アジア人文学リーダー養成のための、日中韓共同運営移動キャンパス】  
(選定年度28年度・(タイプA-1 CAMPUS Asia))

### ■ 交流プログラムの実施状況



〈CAP共修授業「キャンパスアジア演習」の様子〉

#### ○移動キャンパスの開始とプログラム生の学び

プログラム1期生を半年ずつ広州(中国)と釜山(韓国)に派遣した。中国・韓国で、キャンパスアジア専用の語学授業を受講し、文法等の基礎力向上に加え発表や討論を行う等、実践的な言語運用力を培った。語学授業以外では、現地の言語で現地の文化・歴史・社会について学んだほか、日中韓の学生がグループを組み調査・発表する授業を通じて、相互の理解を深めた。

#### ○移動キャンパス 外国人留学生の学び

中韓CAP生は、語学授業を通じ日本語運用力の習得に力を注ぐとともに、「キャンパスアジア演習」「日本研究」等のキャンパスアジア専門科目を受講し、東アジアや日本への知見を深めた。また、本学文学部の科目から、東アジアや日本に関する一般・専門科目を受講し、現地の言語で人文学を学ぶことの意義を感じることができた。

#### ○国際的なピアラーニング・ピアサポート

中韓CAP生と日本人サポーター(中韓学生の生活・学習を支援する学生組織)が共修する「キャンパスアジア演習」を開講し、日中韓の学生がともに学ぶ体制を整えた。演習授業で東アジアの諸問題について学び、討論することで、相互理解を深めることができた。授業外では、CAPカフェで、サポーターによる日常的な学習支援が行われた。また、初めての移動キャンパスとなるプログラム2期生のために、中国CAP生による、中国語発音トレーニングが実施され、受入学生によるサポートも行われた。

### 交流プログラムにおける学生のモビリティ

#### ○日本人学生の派遣

移動キャンパス1周めとして、プログラム1期生20名を2つのグループに分け、各グループ半年ずつ広州(中国)と釜山(韓国)に派遣した。平成30年2月には、1期生の2周めの派遣を開始し、それに併せ1年間の派遣前教育を終えたプログラム2期生を、中国に10名・韓国に9名派遣した。

#### ○外国人留学生の受入

本学における移動キャンパスでは、2つのグループに分かれた中国・韓国の学生を、各グループ半年ずつ受け入れた。広州(中国)より20名・釜山(韓国)より14名の学生を受け入れた。

#### ○移動キャンパス以外の学生派遣・受入

派遣については、期間が1週間程度のプログラムを中国に20名・韓国に37名、2週間程度のプログラムを中国に12名・韓国に18名、1ヶ月程度のプログラムを中国に11名、1 Semesterのプログラムが韓国に1名派遣した。また、受入については、修士複数学位制度で中国から2名、韓国から2名、1週間程度の日韓中連携講座・夏期集中講義で中国から34名・韓国から14名を受け入れた。

<タイプA-①>

H29 各国での受入学生数		
受入国	移動 キャンパス	その他 プログラム
日本(J)	C 20 K 14	C 36 K 16
中国(C)	J 26 K 23	J 43 K 0
韓国(K)	J 29 C 30	J 55 C 13

### ■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

#### ○3大学教職員合同会議と実務者会議の継続的实施

平成28年度に引き続き、7月末に本学で3大学教職員合同会議を開催した。また、4月と7月(合同会議と合わせて開催)の計2回の実務者会議を実施した。

#### ○キャンパスアジア教授会の発足

合同会議での合意に基づき、3大学のCAP教員で構成される「キャンパスアジア教授会」を発足した。1月に遠隔会議システムを利用して第1回会議を行い、各大学の開講科目や学生管理等、プログラムの教学に関する課題を共有し、改善に向けて議論した。

#### ○語学授業担当教員会議

4月上旬にCAP関連科目の授業を担当する教員15名が集まり会議を行った。初めて授業を担当する先生方にプログラムの特徴についての説明を行ったり、各授業の状況に関する意見交換や、情報交換を行った。



〈第1回キャンパスアジア教授会の様子〉

### ■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

外国人留学生の受入では、CAP担当教員が留学生全員と面談を実施した。プログラムに関する要望や日本での生活に関しての相談を受け、学生生活のサポートを行った。

派遣学生については、プログラム専任教員が派遣先大学を訪問し、授業の視察と学生面談を行い、留学先での学習・生活状況を確認している。また、各学期の留学終了後には、短期集中講義(人文学演習)を実施し、学生が留学時の経験や問題点を学生が振り返る時間を設けた。短期集中講義中には、CAP日本人学生とCAP中韓学生の留学報告会(以下、グッドプラクティス等で記載)を行った。

### ■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況/情報の公開、成果の普及

学生のサポート体制の強化として、中国・韓国に留学経験があり語学にも長けたプログラム専任教員を2名雇用した。また、言語教育・異文化教育の研究者によるCAP生への個別インタビューとアンケート結果に関する情報共有を行った。今後のプログラムの成果に繋がるように、この結果をプログラム担当教員内でも共有・分析した。

### ■ グッドプラクティス等

#### ○留学報告会

7月下旬、立命館大学平井嘉一郎記念図書館1階のオープン学習スペース「ぴあら」で留学報告会を開催した。中国・韓国留学から帰国したCAP日本人学生と、日本に留学中のCAP中韓学生が留学経験を生かした研究発表を行った。報告会には、後輩のCAP2期生やキャンパスアジア以外の学生・高校生も参加した。この留学報告会で、プログラム内容・取組について広く発信することができた。

### 3. 取組内容の進捗状況(平成30年度)

【東アジア人文学リーダー養成のための、日中韓共同運営移動キャンパス】  
(選定年度28年度・(タイプA-1 CAMPUS Asia))

#### ■ 交流プログラムの実施状況



〈韓国での語学授業の様子〉

#### ○移動キャンパスの開始とプログラム生の学び

移動キャンパス2周めの1期生には、1年めで培った言語運用力をさらに伸ばすために、より高度な内容の語学科目が提供された。フィールドワークや専門科目で、出身国・学年を越えてともに調査・発表・議論を行い、東アジアや中国・韓国への知見を深めた。また、1期生は帰国後の卒業論文執筆に向けて、現地で資料収集・調査を行った。

#### ○移動キャンパス 外国人留学生の学び

移動キャンパス2周めの中韓CAP生は、1周めより高度な内容の語学科目を受講し、実践的な日本語運用力を身につけた。2周めの学生のほとんどが教養・専門科目を2科目以上受講した。また、プログラムの中核科目である「キャンパスアジア演習Ⅳ」では論文講読・資料料読解・研究発表を行い、卒業論文執筆に向けて研究能力を養った。

#### ○国際的なピアラーニング・ピアサポート

日中韓の学生が共修する「キャンパスアジア演習Ⅲ(1周め)」「キャンパスアジア演習Ⅳ(2周め)」は、本年度よりサポーターだけでなくプログラム外の日本人学生も受講しており、中韓CAP生には様々な学生と意見交換できる機会を、本学学生には日常的に中韓CAP生と交流する場を提供した。授業外では、サポーターが企画・実施したフィールドワークで、日本社会・文化に触れ学ぶ機会を用意した。

#### 交流プログラムにおける学生のモビリティ

##### ○日本人学生の派遣

移動キャンパス2年めとなり、プログラム1期生16名(2周め)、2期生19名(1周め)をそれぞれ2つのグループに分け、半年ずつ広州(中国)と釜山(韓国)に派遣した。平成31年1月には、1期生が2年間の移動キャンパスを終え帰国した。平成31年2月には、2期生の2周めの派遣を開始し、それに併せ1年間の派遣前教育を終えたプログラム3期生を、中国に10名・韓国に10名派遣した。

##### ○外国人留学生の受入

本学における移動キャンパスでは、2つのグループに分かれた中国・韓国の1期生・2期生を、各グループ半年ずつ受け入れた。広州(中国)より40名・釜山(韓国)より31名の学生を受け入れた。

##### ○移動キャンパス以外の学生派遣・受入

派遣については、期間が1週間程度のプログラムを中国に35名・韓国に14名、2週間程度のプログラムを中国に8名・韓国に7名、1ヶ月程度のプログラムを中国に12名派遣した。また、受入については、1週間程度の日韓中連携講座・夏期集中講義で中国から21名・韓国から18名を受け入れた。

<タイプA-①>

H30 各国での受入学生数		
受入国	移動 キャンパス	その他 プログラム
日本(J)	C 40 K 31	C 21 K 18
中国(C)	J 33 K 30	J 55 K 9
韓国(K)	J 36 C 40	J 21 C 0

#### ■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

##### ○三大学教職員合同会議と実務者会議、CAP教授会の継続的实施

平成29年度に引き続き、7月末に中国・広州の広東外語外貿大学で三大学教職員合同会議を開催した。また、実務者会議は、7月と1月の計2回、教授会は1月に1回実施した。

##### ○FD調査の実施

本学キャンパスアジア・プログラム担当教職員が11月28日～12月5日にかけて、中国・韓国でFD調査を行った。中国では、深圳大学と暨南大学に、韓国では、釜山外国語大学校と高麗大学校に訪問し、各大学の国際交流に関する情報収集を行った。

#### ■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

日本人学生には、大学入学時にプログラムガイダンスを行い、派遣前教育や本プログラムの4年間の学びについて説明した。また、留学前にもガイダンスを実施し、留学に関する手続きや奨学金についての説明、また現地の生活に関するQ&Aの時間を設けた。

受入の外国人留学生には、入国後に生活ガイダンスや履修ガイダンスを国際課と連携して行い、帰国前にもガイダンスを実施した。ガイダンスでは、外部の講師を招き、留学生用のキャリアについての紹介も行った。



〈韓国・釜山でのインターンシップの様子〉

#### ■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況/情報の公開、成果の普及

2月に、本学と同じくキャンパスアジア・プログラムを運営している神戸大学・岡山大学の担当教職員との情報交換会を行った。各大学の取組状況や畝に方法等の情報を交換し、今後の本学のプログラム運営の参考となった。

また本年度は、本学文学部のAO入試専用HPを一新し、HPを利用する受験生や保護者の方に使いやすい仕様に変更した。

#### ■ グッドプラクティス等

##### ○海外インターンシップの実施

H30年度春学期・秋学期それぞれに中国・韓国で海外インターンシップを実施した。中国では、広州にある教育業界や広告業界等の企業6社に日韓の学生計18名が、韓国では出版業界やホテル業界等の企業6社に日中の学生が計17名参加した。

また、日本に留学中の外国人学生に対して、日本国内のマスコミ業界や市役所3社提供し、計9名の学生が参加した。学生にとって、海外での就職やグローバル企業に目を向ける良い機会となった。

## 4. 取組内容の進捗状況(令和元年度)

【東アジア人文学リーダー養成のための、日中韓共同運営移動キャンパス】  
(選定年度28年度・(タイプA-1 CAMPUS Asia))

### ■ 交流プログラムの実施状況



〈「タンデム活動」の様子〉

#### ○国際的なピアラーニング・ピアサポート

日中韓の学生がペアとなる「タンデム活動」という取り組みを行った。「タンデム活動」ではペアとなった学生同士に、キャンパス内での生活を共にして交流を深める機会や、言語交換パートナーとして共に学び合う機会を提供した。また、日中韓の学生が共修する「キャンパスアジア演習Ⅲ(1周め)」「キャンパスアジア演習Ⅳ(2周め)」では、昨年度に引き続き日中韓の学生同士が交流し意見交換できる機会を提供した。授業外では、フィールドワークで、日本社会・文化に触れ学ぶ機会を用意した。

### 交流プログラムにおける学生のモビリティ

#### ○日本人学生の派遣

移動キャンパス3年めとなり、プログラム2期生16名(2周め)、3期生20名(1周め)をそれぞれ2つのグループに分け、半年ずつ広州(中国)と釜山(韓国)に派遣した。令和2年1月には、2期生が2年間の移動キャンパスを終え帰国した。

#### ○外国人留学生の受入

本学における移動キャンパスでは、2つのグループに分かれた中国・韓国の2期生・3期生を、各グループ半年ずつ受け入れた。広州(中国)より40名・釜山(韓国)より35名の学生を受け入れた。

#### ○移動キャンパス以外の学生派遣・受入

派遣については、期間が1週間程度のプログラムを韓国に13名、2週間程度のプログラムを中国に10名、韓国に5名、1ヶ月程度のプログラムを中国に5名派遣した。また、受入については、1週間程度の日韓中連携講座・春期集中講義で韓国から11名を受け入れた。

### ■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

#### ○三大学教職員合同会議と実務者会議、CAP教授会の継続的实施

平成30年度に引き続き、7月末に韓国・釜山の東西大学校で三大学教職員合同会議を開催した。また、実務者会議は、7月と1月の計2回、教授会は5月と2月の2回実施した。

#### ○FD調査の実施

本学キャンパスアジア・プログラム担当教職員が7月31日-8月1日にかけて韓国で、11月24日~11月27日にかけて中国でFD調査を行った。韓国では釜慶大学校・東亜大学校に、中国では、上海外国語・上海交通大学・南京大学を訪問し、各大学の国際交流に関する情報収集を行った。

### ■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

外国人学生の受入では、生活ガイダンスや履修ガイダンスの実施に加え、留学期間が終了する前に教員との個人面談を行い、学生状況の把握を行った。また日本での就職に向けたキャリアガイダンスへの参加の機会も提供した。

日本人学生には、大学入学時にプログラムガイダンスを行い、派遣前教育や本プログラムの4年間の学びについて説明した。また、日中韓3か国のプログラム学生1回生が集い、遠隔接続システムを利用した「キャンパスアジア結団式」を実施し、移動キャンパスへの期待と抱負を共有した。

### ■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況/情報の公開、成果の普及

6月に海外留学の学修成果測定プログラムであるBEVI-JIについての研修会を実施した。BEVI-JIは本プログラムの学習効果を、語学力以外で可視化するための有益なシステムであると考え、7月に試験的に実施した。今後もプログラムの節目で定期的実施することで、プログラム学生たちが4年間の学びのなかで自らの成長を実感し自己省察する機会を与え、プログラムの質保証の検証、再構築に活用する予定である。

### ■ グッドプラクティス等

#### ○立命館大学文学部ゼミナール大会への外国人学生の参加

立命館大学文学部では学生の学術的な発展と交流を目的としてゼミナール大会を開催している。11月に行われた予選会には、中韓学生のグループが参加し、「みんなに伝えたい東アジアの絵画」というタイトルで、日中韓の様々な絵画作品を紹介する発表を行った。発表後は予選会に参加した学生と審査員の教員から積極的な質問があり、活発な意見交換が行われた。

#### ○移動キャンパスの学びと派遣後教育

移動キャンパスでは、プログラム参加学生からの意見をもとに、派遣先大学と協議し、各大学が提供する授業内容の改善を行い、より専門内容に特化した授業の提供を行った。また、2年間の移動キャンパスを修了した1期生に対し、派遣後教育として、日中韓の3か国語での卒業論文の要旨の作成について指導を行った。また、移動キャンパスを終えて4回生となったプログラム学生が、自らの就職活動の経験を伝える「就職活動交流会」を実施し、キャリア形成について考える場を提供した。

#### ○移動キャンパス 外国人留学生の学び

2年間の移動キャンパスを修了した学生の学びを踏まえて、各自の日本語運用能力に応じた習熟度別の日本語科目を受講し、効果的に日本語運用能力を高めた。また、プログラムの中核科目である「キャンパスアジア演習」で学んだ論文講読・資料料読解・研究発表の力を活かし、日中韓の学生はそれぞれの国で卒業論文執筆を行った。

#### <タイプA-①>

R1 各国での受入学生数		
受入国	移動 キャンパス	その他 プログラム
日本(J)	C 40 K 35	C 0 K 11
中国(C)	J 30 K 35	J 15 K 0
韓国(K)	J 34 C 40	J 29 C 6



〈ゼミナール大会の様子〉

# 5. 取組内容の進捗状況(令和2年度)

【立命館大学】

【東アジア人文学リーダー養成のための、日中韓共同運営移動キャンパス】

(選定年度28年度・(タイプA-① CAMPUS Asia))

## ■ 交流プログラムの実施状況

### ○コロナ禍における日本人学生の学び

現地渡航が中止となり、年間を通じて中韓の大学から提供された中国語・韓国語によるオンライン授業を提供した。これらの授業の学生への単位授与を保証するために、本学教員による事前・事後講義を組み合わせる新しい授業の仕組みを構築した。また、長期休暇時に開講される、本学の「人文学演習」を学期中に移行し、中韓の大学の教員によるオンデマンド講義と本学教員による解説講義を交互に進め、中国・韓国に関する専門知識の深化を図った。

### ○コロナ禍における外国人留学生の学び

渡航中止と同時に、全科目をオンラインで提供するオンライン留学に切り替えた。例年設置している日本語履修科目では、同時双方向での授業を実施して各自の習熟度に応じた学びを提供し、日本語運用力の向上に努めた。また、カリキュラムの中核である「キャンパスアジア演習」では、論文講読・資史料読解・研究発表を通じて、卒業論文執筆に必要な研究スキルを養った。



〈「CAP Language Café」の様子〉

### ○オンラインでの学生交流

立命プログラム学生どうしの親睦と授業外語学学習の補助、中韓プログラム学生との交流機会の提供を目的として「CAP Language Café」を毎週運営した。教員による語学学習オフィスアワーやオンラインでの中韓プログラム学生との意見交換会を行い、対話機会を設けることで、学びのコミュニティ形成を図った。

また、オンライン学生交流会を年間5回実施した。3大学の学生が企画・運営を担当し、日中韓3か国語でプレゼンテーションを行ったり、回ごとに疎通言語を変えたりすることで、コミュニケーション力を相互に高める機会を提供した。

## 交流プログラムにおける学生のモビリティ

### ○日本人学生の派遣

移動キャンパス4年目に入ったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、プログラム3期生16名(2周目)、4期生21名(1周目)は、中韓両大学から提供される授業をすべてオンラインで受講することとなった。それぞれ2つのグループに分かれて、1学期ずつ広東外語外貿大学(中国)と東西大学校(韓国)のオンライン授業群を中韓学生とともに受講し、オンライン交流を通じて、現地留学の代替とした。

### ○外国人留学生の受入

日本人学生同様、コロナ禍による渡航中止を余儀なくされたが、立命館大学から提供されるキャンパスアジア・プログラム専門科目、日本語履修科目、文学部開講科目をオンラインで受講した。2つのグループに分かれた中国・韓国の3期生・4期生を、各グループ1学期ずつ受け入れた。中国39名、韓国28名が参加した。

〈タイプA-①〉

	R2
日本(J)での受入	C 39 K 28
中国(C)での受入	J 28 K 28
韓国(K)での受入	J 34 C 39

## ■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

### ○3大学教職員合同会議・実務者会議、CAP教授会のオンラインでの実施

令和元年度に引き続き、7月に3大学教職員合同会議を開催した。コロナ禍によるオンラインでの開催となったが、移動キャンパスの再開に向けて建設的な議論を行った。相互提供科目やWEB授業の効果などに加え、令和3年度以降の運営についても意見交換を行った。また、教授会を1月にオンラインで開催し、プログラム修了生の承認、各国・各大学の現状の共有、授業内容の確認・調整など、継続可能なプログラムの質的向上に向けた議論を重ねた。

## ■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

全面オンラインでの授業実施にあたり、本プログラムの科目担当教員にオンライン授業実施研修を行った。全学が提供する諸支援に加え、外国人学生に対しては、中国語・韓国語のガイドブックを作成して丁寧に説明し、不自由なく学びを継続できるようにサポートした。日本人学生には、7月に履修ガイダンス、11月に移動キャンパスの手続きに関するガイダンスを開催し、4年間の履修やキャンパスアジア独自の学びについて説明を行った。また、日中韓3か国のプログラム学生1年生を対象に、遠隔接続システムを用いた「キャンパスアジア・プログラム結団式」を行った。第1言語以外の言語で、6期生一人一人が自己紹介をするとともに各大学の代表学生がスピーチを行い、移動キャンパスへの期待や抱負を共有した。

## ■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況／情報の公開、成果の普及

8月に国際カリキュラム・プログラム課題検討懇談会が実施された。コロナ禍のもと国際教育カリキュラム・プログラムを推進している学部・教学機関において、本プログラムの現状を報告し類似問題・課題に対して、知見の共有や共同で対応していく契機とした。

## ■ グッドプラクティス等

### ○オンライン多文化交流への参加

本学「Withコロナ社会形成に向けた研究 Visionaries for the New Normal プロジェクト」主催の「オンラインで異文化交流しよう」に中韓のプログラム学生が多数参加した。特定の言語のみを学ぶ場ではなく、トランスランゲージング実践の場として、オンライン翻訳ツールの利用、参加者間の助け合い、傾聴など、コロナ禍においてプログラム以外の学びを進める良い機会となった。



〈「日本研究Ⅳ」での中韓学生発表の様子〉